

蚊取り線香

1. 概要

蚊取り線香は、ピレスロイド系殺虫剤（dl・d-T80-アレスリンまたはアレスリン、ピレトリン）を殺虫成分とし、木粉、澱粉などを加えて成型したもの。
蚊取り線香 1 巻（約 13g）に 34～80mg の殺虫成分を含有する。

2. 毒性

一般に、線香 1 かけら程度の誤食では中毒症状は出現しないと考えられている
蚊取り線香による動物実験（マウス、ラット）での急性経口毒性は、
4.8g/kg でも全く害がない（ヒトに換算すると体重 10kg の幼児では 3.5 巻、
成人では 15～22 巻以上の量）
吸入曝露実験では、通常使用法の 20～30 倍濃度、1 日 8 時間、連続 5 週間でも
異常なし(1)

3. 症状

通常誤食では中毒症状の発現は考えられない
大量摂取では、嘔気、嘔吐、下痢、口唇・舌のしびれ感、めまい、顔面蒼白、
痙攣などあり
大量の吸入により、くしゃみ、鼻炎、咳嗽、悪心、頭痛、耳鳴り、昏睡など
あり
過敏症者では、皮膚炎、アナフィラキシーショックを起こす

4. 処置

線香 1 かけら程度の誤食では特別な処置は必要なし
家庭で可能な処置
少量の場合、口をゆすがせ様子を見る
医療機関での処置
大量摂取した場合
基本処置（催吐または胃洗浄、吸着剤と塩類下剤の投与など）
対症療法：痙攣対策（ジアゼパム、フェニトイン、フェノバルビタール）
呼吸抑制の場合、必要に応じて酸素投与、人工呼吸

5. 確認事項

- 1) 摂取量、使用程度：蚊取り線香の状態は使用前のものか、使用中のものか、
灰か
- 2) 患者の状態

6. 情報提供時の要点

- 1) 何れも、なめたり、しゃぶったり、1 かけら程度の誤食では、一般に中毒症状
はみられない
- 2) 線香自体の物理的障害が考えられるので、食道に停滞していたり、気道内に
入った可能性があるなら医療機関への受診を指示

7. 体内動態

ピレスロイド剤として

吸収：速やかに吸収・・・ラットでは、摂取 30 分～1 時間半後に脳で最高血中濃度を示し、症状発現をみたとの報告あり(2)
分布：あらゆる組織に分布。哺乳類では、エステルの分解と酸化が速やかに行われるので低毒性を示す(2)

8. 中毒学的薬理作用

ピレスロイド剤として

哺乳類に対する毒作用機序は不明だが、中枢神経刺激作用と痙攣誘発作用あり(3)

9. 治療上の注意点

アレルギー作用による呼吸障害は、一般に抗ヒスタミン剤の投与で対処できるが、重篤な場合はエピネフリンで対処

10. 参考文献

- (1) 鵜飼 卓：救急医学、3 (10) : 1393、1979
- (2) Poisindex (1989)
- (3) Clinical Toxicology of Commercial Products (1984)

11. 作成日

19900215 Ver. 1.00

ID M70049_0100_2